

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：82674

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K19718

研究課題名（和文）要介護認定で見られる「認知症」の発症前過程に基づく類型化と類型別予防法の検討

研究課題名（英文）Latent growth modelling of signs preceding dementia as certified in the Long-Term Care Insurance System

研究代表者

天野 秀紀（Amano, Hidenori）

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター（東京都健康長寿医療センター研究所）・東京都健康長寿医療センター研究所・研究助手

研究者番号：90260306

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,800,000円

研究成果の概要（和文）：地域高齢者の12年間の縦断研究に基づき、健診時の認知機能低下、意欲低下、抑うつの有無別に、将来の認知症発症リスクを示した。意欲低下や抑うつを伴わない軽度認知機能低下では認知症発症リスクは高まらず、いずれかを伴う軽度認知機能では認知症リスクが高まった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

物忘れ外来受診者の中では意欲低下者の予後が悪いことが知られているが、一般高齢者における意欲低下所見の意義は確立されていない。本研究は、一般高齢者の中の特定の集団において、意欲低下が認知症リスクを高めることを示した。

研究成果の概要（英文）：Although apathy is known to indicate higher risk of dementia incidence in the setting of memory clinic, its predictive value in community dwellers remains to be elucidated. The present study suggests that apathy symptoms are informative to predict dementia in sub groups of community dwellers, including younger olds and those with mildly declined performance in cognitive tests.

研究分野：疫学

キーワード：介護保険 認知症 意欲低下 抑うつ

1. 研究開始当初の背景

高齢者人口の約1割、要介護認定者の約6割が介護保険制度下で認知症とみなされている。そこには多様な原因疾患による認知症の他、認知症と区別のつきにくい様々な病態が含まれているかもしれない。そのいずれについても、予防が望まれる。

2. 研究の目的

要介護認定審査にて認知症と見做された例を、発症前の健診成績の経年変化パターンにより類型化し、類型ごとの危険因子を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

地域高齢者を対象とした健康診査を18年に渡り毎年実施した。認知機能をMini-Mental State Examination(MMSE)、気分をGeriatric Depression Scale(GDS)-15にて測定した。GDS-15の結果は合計点6点以上を抑うつ、合計点5点以下かつ意欲低下を示唆する3項目中2項目以上該当を意欲低下と分類した。これらの健診データと要介護認定審査における調査データ・医師所見データ及び住民基本台帳データを突合した。医師所見にて認知症高齢者の自立度がIIa以上とされた時点を認知症発症と見做した。発症例の発症前5年間における健診成績の縦断データに帰納的な分類手法 (group-based trajectory model) を適用することにより、発症例を類型化した。この類型別に、発症リスクを規定する初回受診時要因を生存時間解析 (Cox回帰) により探索した。

4. 研究成果

(1) 認知症発症予測における意欲低下・抑うつ症状の意義

要介護認定における認知症発症に至る過程で認知機能検査成績の低下と並び、意欲低下や抑うつ症状が高頻度で観察されたため、当初計画の副次的成果として、認知症発症予測におけるこれらの症候の意義を整理して示すこととした。

① 認知機能検査成績が中等度の低下を示す場合 (MMSE21-23点) は、意欲低下や抑うつ症状の有無によらず認知症発症リスクが有意に高かった (基準群を意欲低下・抑うつのない認知機能健常者とした場合のハザード比は3.0~5.7; 性、年齢、脳卒中既往を調整したCox回帰)。認知機能の軽度低下 (MMSE24-26点) 所見は、意欲低下や抑うつ症状を伴う場合は有意に高い認知症リスクを示した (ハザード比はいずれも2.6) が、それらを伴わない場合の認知症リスクは基準群と同等であった。認知機能が健常の場合、抑うつ所見は有意に高い認知症リスクを示した (ハザード比2.4) のに対し、意欲低下所見は認知症リスクに影響しなかった。

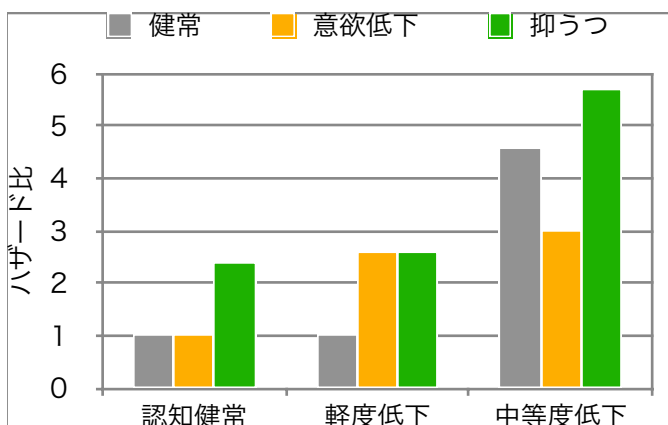


図1. 認知機能低下・意欲低下・抑うつ
の組み合わせと認知症発症リスク
性、年齢を調整したCOX回帰

② 意欲低下・抑うつと認知症発症リスクとの関係を、年齢層別に検討した。抑うつは65歳以上の全年齢で認知症リスクと関連したのに対し、意欲低下は65-74歳のみにおいて認知症リスクと関連した（性、年齢、認知機能を調整したCox回帰）

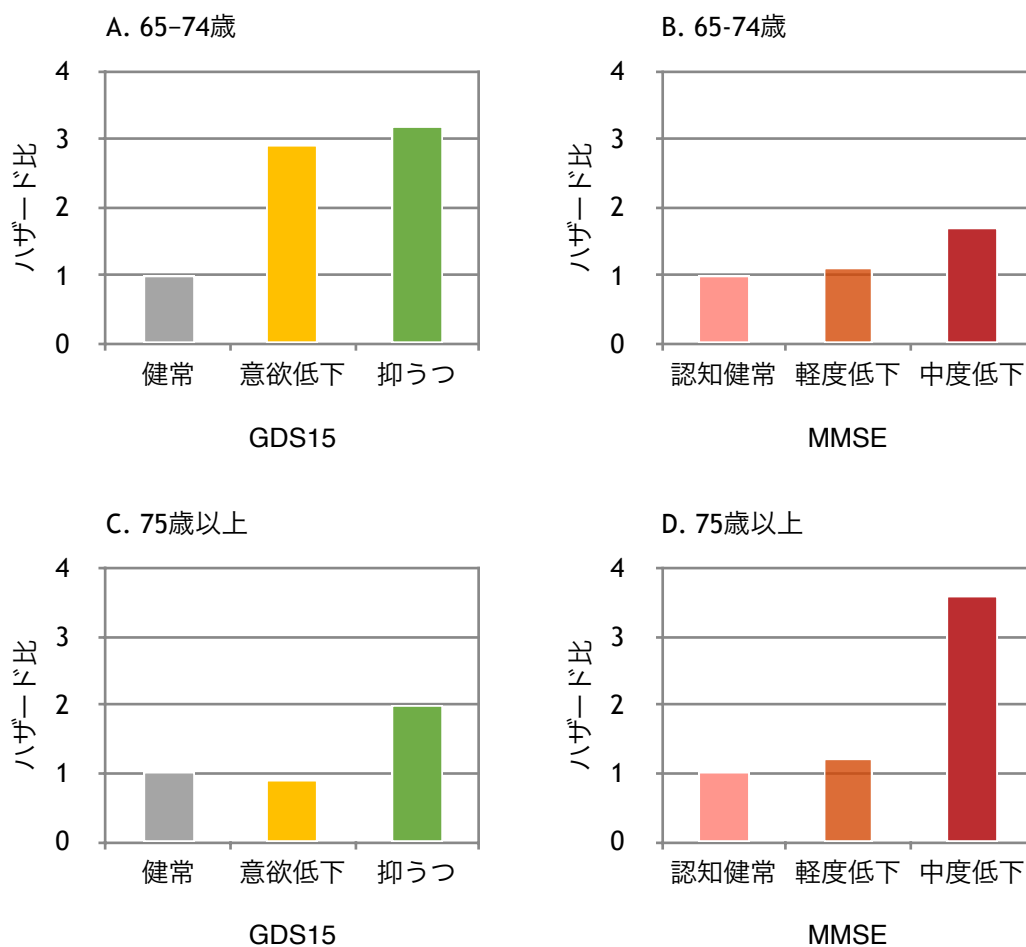


図2. 年齢層別に見た意欲低下・抑うつと認知機能低下の認知症発症リスクへの影響
性、年齢、認知機能(A,C)、意欲低下・抑うつ(B,D)を調整したCox回帰

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Amano H, Nofuji Y, Seino S, Yokoyama Y, Abe T, Yamashita M, Hata T, Shinkai S, Kitamura A, and Fujiwara Y
2. 発表標題 Apathetic symptoms and the risk of incident dementia certified in the Long-Term Care Insurance System: a 12-year cohort study of the community dwelling elderly in Japan
3. 学会等名 IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 天野秀紀 北村明彦 西真理子 野藤悠 清野諭 横山友里 成田美紀 池内朋子 吉田裕人 藤原桂典
2. 発表標題 地域高齢者における意欲低下・抑うつ・認知機能低下と「認知症」発症リスクー会場健診と要介護認定審査に基づくコホート研究ー
3. 学会等名 第35回日本老年精神医学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 天野 秀紀、北村 明彦、西 真理子、野藤 悠、清野 諭、横山 友里、藤原 佳典、新開 省二
2. 発表標題 要介護認定で見られる「認知症」の多様性：発症時重症度と発症前認知機能・抑うつ関連症状の推移に基づく類型化
3. 学会等名 第30回日本疫学会学術総会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Amano H, Kitamura A, Yokoyama Y, Narita M, Nishi M, Yoshida H, Fujiwara Y, and Shinkai S
2. 発表標題 Risk factors for types of dementia classified on multivariate trajectories of cognitive functions before incidence
3. 学会等名 The Gerontological Society of America's 2018 Annual Scientific Meeting (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 天野秀紀、北村明彦、横山友里、成田美紀、西真理子、谷口優、清野諭、吉田裕人、藤原佳典、新開省二
2. 発表標題 要介護認定で見られる「認知症」の発症様式・発症前認知機能変化に基づく類型化と類型別危険因子
3. 学会等名 第61回日本老年医学会学術集会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関